『長崎国際大学論叢』 第９巻　2009年３月　９頁～21頁

村上春樹の文体・翻訳研究
――『風の歌を聴け』における「ように」を中心に――

田　中　　誠
（長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科）

要　旨
翻訳研究は、学問分野としての歴史はまだ浅い。この分野の学問の発展のために、基礎データを構築していきたいと筆者は考えている。そこで、この稿では村上春樹の「喩え」の表現のなかでも「ように」が使用されている用例に焦点を絞って、翻訳されるときにどのように英語で表現されているのかを考察する。また、丹念に用例をみていくことで、domestication[1] の影響についても考察するが、この作品のようにアメリカ文学の影響の強い作品においても、domestication の影響は存在するということを述べる。

キーワード
翻訳研究、文体研究、類似事態、パラレルコーパス、domestication

はじめに

翻訳は実務的側面が強いので、翻訳研究という学問分野としての歴史はまだ浅い。この分野の学問としての研究が進んでいくためには、様々な要因が必要であるが、身近な実践例を取り上げて、少しずつ基礎データを構築していきたいと筆者は考えている。そこで、英語に翻訳されている作品が多く、しかも、海外でも定評のある村上春樹の作品に関して、まず基礎データを構築していくことにした。村上春樹の平明で、アメリカ文学の影響を強く受けたと見られる文体は、多くの研究がなされており、それ自体研究の対象として非常に興味深い。また、その文章が英語に翻訳されたものを読んでも、村上春樹の世界は、翻訳により大きく損なわれているようには、筆者には感じられない。それは、村上春樹の作品を英語に翻訳している人たちの翻訳のレベルが高いことの表れであり、だからこそ、海外でも評価されているのだと思う。

この稿では、まず村上春樹のデビュー作『風の歌を聴け』における「ように」という表現が、英語に翻訳される際にどのように翻訳されているのかを考察する[2]。「ように」の用法をまず選んだ理由は、村上春樹の「喩え」の表現の巧みさは、多くの人が認めているところであると考えられるし（cf. 柴田他（編）（2006）、村上・柴田（2000）、村上春樹研究会（編）（2001））、彼の文体を考えるときに、非常に大きな意味を持つと筆者は考えているからである。

1．手　順

まず、選んだテキストをコンピュータ処理できるように、パラレルコーパスを作成することにした。コーパス作成に使用した版は以下の通りである。

村上春樹 （1979）『風の歌を聴け』講談社文庫（2004）.

Murakami, Haruki.（1979）*Hear the Wind Sing*. Translated by Alfred Birnbaum. Kodansha International Ltd.（1987）.

まず、上記の作品をスキャナーで読み取り、

テキストに変換した。その後、今回は日本語から英語への翻訳なので、日本語の文に対応する英文をつけるという形式でコーパスを作成した。この際に、変換ミスがないことを、一文一文確認した。この作業は Excel で行い、データベースとして活用するために Access にデータを移して、検索を容易にできるようにした。そして、Access で「ように」の用例をフィルタで抽出し、一例ずつ用例を分類し確認する作業を行った。今回はタグ付けの必要な分類は行わないので、タグ付けは行わなかった。

「ように」の分類は、国語学の分野でも様々であるが、筆者は前田（2006）の分類に基づき、まず４つの範疇（①類似事態、②結果・目的、③思考・知覚内容、④命令・祈願内容）に分類し、そのうち①の類似事態について、本稿では取り扱うことにした。その理由は、村上春樹の巧みな「喩え」の表現が、英語に翻訳されるとき、どのような表現が使われているのかに興味があるし、他の②、③、④の用法は①とは異質な部分も多いからである。

類似事態に関して、前田（2006）はさらに３つの下位範疇に分類している。比喩、様態、同等である。本稿でも、それにならい分類した。ただし、この３分類は、重なり合う部分も多く、特に比喩と様態はどちらの解釈もできそうな例もあり、プロトタイプ構造をなすものとして筆者は捉えているが、この稿での線引きは、前田（2006）にならい、レアリティーの反事実的事態を基準に分類している[3)]。

２． 分類の結果

日本語は、2,308文（歌のタイトル等も便宜上１文とカウント）、英語は2,289文から構成されていた。日本語のそれぞれの文に、対応する英文をつけていく作業を行った結果、「ように」というフレーズが使われている文は63文。うち１文に２つ「ように」が出てくるので、用例としては64例があった。この64例を前田（2006）にならい分類すると表１のような結果となった。

村上春樹の文体の特徴である類似事態の表現が58例あり、これらの用例をさらに下位範疇に分類すると、表２のような結果となった。

予想通りではあるが、比喩の表現はさすがに多いことが分かる。類似事態に表現を絞って翻訳の事例を個別に見ていくと、日本語の「ように」が英語では、表３のような表現を使って翻訳されていることが分かった。分析は後で行うが、like と as if は、事例の数も多いことが分かる。「翻訳なし」とあるのは、この作品の翻訳者の Alfred Birnbaum は、村上・柴田（2000：18）でも、その翻訳の傾向について「正確かどうかよりは、出来上がりの形を重視する。だからわりに自由にやって、部分的に適当に削ったりもする」と述べられているように、対応する翻訳がない部分がある。そういう事例が２例あった。

さらに、細かく類似事態の下位範疇ごとに結果を見てみることにする。表４は比喩用法の「ように」がどのように英語に翻訳されているのかをまとめた表である。like が多く使われていることが分かる。

表５は、様態用法の「ように」がどのように

表**1**　「ように」の用法による分類

類似事態	58
結　果・目　的	5
思考・知覚内容	0
命令・祈願内容	1
合　計	64

表**2**　類似事態の下位分類

比　　喩	33
様　　態	15
同　　等	10
合　計	58

（＊比喩には、「まるで～ように」14例、「～かのように」３例含む）

英語に翻訳されているのかをまとめた表である。as if が多く使われていることが分かる。日本語からの分類でいくと、比喩用法の方ではなく、様態用法の翻訳事例で as if が目立っているのは興味深い。

表６は、同等用法の「ように」がどのように英語に翻訳されているかをまとめた表である。同等用法では比喩、様態用法と違い as if の事例がないことが見てとれる。

３．考　察

ここでは、類似事態の「ように」が、どのように英語に翻訳されているのかを下位範疇ごとに、用例に沿って考察していく（用例の下線は筆者）。全ての用例をみることは紙幅の都合上できないので、主立った用例のみを取り上げていくことにする。翻訳の用例をみていく際に、その事例が、domestication されたものであるのかどうか、その影響も確認していきたい。

３.１　比喩用法

３.１.１　like の用例

まず、like の用例をみていく。like（11例）の用例は、as if（６例）の用例より多い。ここ

表３　類似事態の翻訳事例

like	14
as if	13
as . . . as	1
as	5
the same as	2
. . . ing	4
p. p.	4
他の表現	13
翻訳なし	2
合　計	58

（＊like には just like ３例 as には just as １例含む）

表４　比喩用法の翻訳事例

like	11
as if	6
as . . . as	1
as	3
the same as	0
. . . ing	3
p. p.	2
他の表現	6
翻訳なし	1
合　計	33

（＊like には just like ２例含む）

表５　様態用法の翻訳事例

like	0
as if	7
as ... as	0
as	0
the same as	0
. . . ing	1
p. p.	2
他の表現	4
翻訳なし	1
合　計	15

表６　同等用法の翻訳事例

like	3
as if	0
as . . . as	0
as	2
the same as	2
. . .ing	0
p. p.	0
他の表現	3
翻訳なし	0
合　計	10

（＊like には just like １例、as には just as １例含む）

ではまず、典型的な用例を２つみてみよう。次の⑴、⑵の用例では、下線部の日本語に沿った形で英語に翻訳がなされている。

⑴a.　やっとの思いで狭いベッドから立ちあがり、ドアの横にある簡単な流し台で馬のように水を何杯か続けざまに飲んでからベッドに戻った。（p. 32）

b.　Well, then, figuring I might as well get up from that cramped bed, I walked over to the sink by the door, downed glass after glass of water like a horse, and went back to bed.（p. 27）

⑵a.　雨で黒く濡れた門柱は荒野に立った２本の墓石のように見える。（p. 129）

b.　The dark, rain-damp gateposts looked like two gravestones standing in the wilderness.（p. 105）

当然のことではあるが、このような典型的な用例ばかりではない。次の例は、英語に翻訳する際に翻訳者が、読者に分かりやすくするために、表現を工夫している例である。domestication の例と考えられる。

⑶a.　彼女は疑り深そうに肯いてから立ち上がってレコード棚まで大股で歩き、よく訓練された犬のようにレコードを抱えて帰ってきた。（p. 64）

b.　She stood up nodding very suspiciously, reached the record rack in a few good strides, and came back bearing the album like a well-trained retriever.（p. 52）

⑷a.　店の中には煙草とウィスキーとフライド・ポテトと腋の下と下水の匂いが、バウムクーヘンのようにきちんと重なりあって淀んでいる。（pp. 45–46）

b.　The interior was a sedimentary cross-section of stale smells – cigarettes and whiskey and french fries and armpits and sewage, packed layer upon layer like a cake.（pp. 38–39）

⑶では、「犬」を“ retriever ”（「レトリバー」）に変えて翻訳してあり、狩猟犬として、獲物をくわえて戻ってくるレトリバーに表現を変えることで、読者がイメージしやすいように翻訳してある。ここでは、上位概念の「犬」から下位概念の“ retriever ”への変換が行われているが、⑷では、逆に下位概念の「バウムクーヘン」から上位概念の“ cake ”（「ケーキ」）へと変換が行われている。⑷ｂの場合、domestication というだけでなく、翻訳者に文章のリズムや流れを“ baumkuchen ”というドイツ語を使うことで損なわれるのを避けたいという意図があったのかもしれない。

次の用例⑸ａの「病人のかさぶたのように」という表現は、何の病気を患っているのか、日本人が読んでも、想像できる人とできない人がいると思う。

⑸a.　デッキの白いペンキは潮風で赤く錆びつき、その脇腹には病人のかさぶたのように貝殻がびっしりとこびりついている。（p. 138）

b.　The white deck paint was rusted from sea spray, and the side of the hull encrusted with barnacles and shells like scabs on a leper.（p. 112）

つまり、日本語の例では、具体的な病名の明示は避けており、その病名は読み手の想像に任されている。しかし、英語の用例では、“ like a scabs on a leper ”（「ハンセン病患者のかさぶたのように」）と病名をはっきりと明示し、イメージがしやすいように変えられている。このような表現の選択にも、domestication の影響があると思う。

次に、like を使用した比喩の例のうち、「まる

で～のように」と「まるで」とセットになった日本語の用例をみることにする。「まるで」とセットになった用例は５例あり、そのうち２例が次のように just like という形で just を伴った形で翻訳されている。

⑹a.　僕は天使の羽根が大学の中庭に降りてくる光景を想像してみたが、遠くから見るとそれはまるでティッシュ・ペーパーのように見えた。（p. 102）

b.　I tried to imagine angel's wings descending on the university courtyard. From far off they looked just like tissue paper.（p. 81）

⑺a.　まるでエンジンの故障した飛行機が重量を減らすために荷物を放り出し、座席を放り出し、そして最後にはあわれなスチュワードを放り出すように、15年の間僕はありとあらゆるものを放り出し、そのかわりに殆んど何も身につけなかった。（p. 11）

b.　Just like when an airplane has engine trouble and they start tossing out the baggage to reduce the weight, then the seats, and finally they'll even toss out the flight attendants. Over these fifteen years I've tossed out all kinds of things, but taken on almost nothing in the process.（p. 8）

⑹の用例では、ほぼ日本語に沿った形で翻訳がなされているが、日本語は１文で書かれているところを英語は２文に分けて書かれており、英語のリズムを壊さないで、読者が読みやすいような配慮を翻訳者がしたものと考えられる。⑺の用例でも、日本語はかなり長い文になっているために、英語では途中で切り、２文に分けている。⑹ｂも⑺ｂも後半の英文では、副詞句が文頭に来ていて、構造上も類似点がみられる。ここでも、読者の読みやすさを意識した翻訳となっている。

次に「まるで～のように」が使われている用例で、“ like some 単数名詞 ” という表現を使用している例をみてみる。この例は２例ある。

⑻a.　最後に会った時、彼はまるで狡猾な猿のようにひどく赤茶けて縮んでいた。（p. 10）

b.　The last time I saw him, he'd shriveled up dark and red like some crafty old monkey.（pp. 7–8）

⑼a.　彼女はそれには答えず、まるで浜辺にうちあげられた人魚のようにしっかりとタオルにくるまったまま天井を睨んでいた。（p. 35）

b.　She didn't even bother to acknowledge my question, but simply stared at the ceiling like some beached mermaid, all wrapped up in her coverlet.（p. 30）

このような some の用法は英語のネイティブの翻訳者でないと、なかなか出てこない表現だと思うが、たまたま２例でてきたのか、この翻訳者の好む表現なのか、他の作品を今後確認していきたい。

３.１.２　as if の用例

as if の用例は、最も日本人英語学習者になじみが深いと考えられる「まるで～のように」が使用されている用例からみていくことにする。「まるで～のように」を使用している日本語の用例は、全体で14例ある。そのうち、as if を翻訳に使用している用例は５例であった。比喩用法の翻訳で as if を使用している英語の用例は６例であるので、１例を除いては、「まるで」が付加された日本語の翻訳に使用されていることになる。用例をみてみよう。

⑽a.　14歳になった春、信じられないことだが、まるで堰を切ったように僕は突然しゃべり始めた。（p. 32）

b.　The spring of my fourteenth year – unbelievable as it must sound – I burst into speech as if a dam had broken.（p. 26）

⑾a.　体はよく日焼けしていたが、時間が経ったために少しくすんだ色に変わり始め、水着の形にくっきりと焼け残った部分は異様に白く、まるで腐敗しかけているように見えた。（p. 33）

b.　Her body had been well tanned, but now the color had begun to fade. Where her swimsuit had covered was stark white, as if the flesh were decaying.（p. 28）

⑽では、「堰を切ったように」という常套句に「まるで」が付加されている。声に出して読んでみると分かるが、この「まるで」があるおかげで、非常にリズム感のある文になっているように筆者には感じられる。英語の方でも、ほぼそのイメージ通りに as if 以下で表現されているように思う。⑾では、日本語では１文で表現されているが、英語では２文で処理されている。また、「まるで」以下には、日本語では主語が明示されていないが、英語では the flesh と具体的に明示されており、読者に分かりやすい句読法と表現が使用されている。

次の⑿の用例では、「まるで橋をわたるように音を立てて僕の上を通り過ぎ」の部分を一語一句訳すのではなく、“ trudged over me as if I were a bridge ” と “ I ” を主語にして、視点を変えて英語では翻訳されている。

⑿a.　様々な人間がやってきて僕に語りかけ、まるで橋をわたるように音を立てて僕の上を通り過ぎ、そして二度と戻ってはこなかった。（p. 8）

b.　All sorts of people have come my way telling their tales, trudged over me as if I were a bridge, then never come back.（p. 6）

確かに、この部分を “ I ” を主語にせず、日本語に沿って英語に直していくと、少し回りくどい英語になるような気がする。うまい処理の仕方だと思う。

3.1.3　as を含む表現

ここでは、as if 以外のas を含んだ表現についてみていく。まず as . . . as のパタンであるが、比喩表現の翻訳事例では⒀にあげる１例のみである。

⒀a.　僕が時折時間潰しに読んでいる本を、彼はいつもまるで蝿が蝿叩きを眺めるように物珍しそうにのぞきこんだ。（p. 22）

b.　On occasion, when I'd be reading to kill time, he'd peer at the book as puzzled as a fly looking at a fly swatter.（p. 18）

この用例では、その状況が目に浮かぶようなユーモラスな表現が使用されている。このような日本語をどう処理するのか翻訳者の腕の見せ所である。この例では、一語一句忠実に訳すというより、全体の仕上がり具合を考えてのことだと思われるが、“ as puzzled as a fly ”（「ハエと同じように困惑して」）と彼の様子をユーモラスに表現している。

次に、「ように」を表す as が単独で使用されている例をみる。比喩用法の翻訳事例では３例が該当する。⒁の例をみてみよう。

⒁a.　カクテル・グラスのようにひんやりとした小さな手で、そこには生まれつきそうであるかのようにごく自然に、４本の指が気持良さそうに並んでいた。（p. 82）

b.　A tiny hand, chilly as a cocktail glass, with four fingers arranged nice and natural as if they'd been that way from

birth.（p. 67）

この例では、「小さな手」の描写に比喩表現が巧みに使われている。英語は後置修飾が中心の言語なので、“ A tiny hand ” と言っておいて、細かい描写が後から来ている。情景が目の前に浮かぶようなうまい翻訳である。

もう一例みておく。

⒂ a.　しかし1938年に母が死んだ時、彼はニューヨークまででかけてエンパイア・ステート・ビルに上り、屋上から飛び下りて蛙のようにペシャンコになって死んだ。（p. 157）

b.　Yet in 1938, when his mother died, he took off for New York, climbed the Empire State Building, and jumped. Flat as a frog, he died.（p. 128）

⒂では、日本語は１文であるが、英語は２文に分けて表現してある。日本語の語順のように“ He died, flat as a frog. ” とせず、“ Flat as a frog, ” と前に持ってきている点が、うまいと思う。英語には“ flat as a pancake ”というフレーズがあるが、ここでは、日本語を活かしてそのまま、“ frog ” を使用して、村上春樹の比喩表現の面白みをきちんと伝えていると思う。

3.1.4　分詞を使用した用例

「ように」の比喩用法の翻訳事例では、現在分詞が３例、過去分詞が２例であった。まず、現在分詞を使用した例をみてみよう。

⒃a.　何をしゃべったのかまるで覚えてはいないが、14年間のブランクを埋め合わせるかのように僕は三カ月かけてしゃべりまくり、７月の半ばにしゃべり終えると40度の熱を出して三日間学校を休んだ。（p. 32）

b.　I have absolutely no memory of what I said, but I talked a storm for three months straight, trying to fill in a thirteen-year void, so by the time I'd talked myself out in the middle of July I was running a hundred-and-four-degree temperature and had to take three days off school.（pp. 26–27）

この⒃では「しゃべりまくる」様子を英語では“ trying to fill in . . . ” と付帯状況を表す挿入句として表現している。ただでさえ長い１文をこれ以上長くして、読みにくくしないようにうまく処理されていると思う。

次の⒄は過去分詞の例である。

⒄a.　レコード棚の隣りには机があり、その上には乾いてミイラのようになった草の塊りがぶらさがっている。（p. 155）

b.　Next to the record cabinet is my desk, and over my desk is pinned a mummified dry lump of grass.（p. 126）

英語の mummify は、『リーダーズ英和辞典』によると、「ミイラ（状）にする［なる］; 干して保存する, ひからび（させ）る ;〈古臭い考えや制度を〉後生大事にする」という訳語が載せてあり、この語が比喩的な意味でも使用頻度が高いことが分かる。この例では、過去分詞を使いうまく処理している。

3.1.5　その他の表現

まず、英語に翻訳するときに、文字通り訳すのではなく別の表現で処理する場合がある。次の例をみてみよう。

⒅a.　そして赤くなるまで叩きつづけてから、まるで気が抜けたように手のひらをじっと眺めた。（p. 138）

b.　Striking and striking until it got red, whereupon she just stared absently at the palm of her hand.（p. 112）

⑲a.　その効果にはかなりの疑問はあったが、うまい具合に戦線が南方に広がっていくと、軟膏は飛ぶように売れ始めた。（p. 107）

b.　And while there were doubts whether the stuff actually worked, by a convenient turn of events the fighting spread south and sales shot up.（p. 86）

⑱の例をみてみると、「まるで気が抜けたように」を“ absently ”という表現で処理しているために英語では likeやas if が登場する必要がない。⑲の例でも、「軟膏は飛ぶように売れ始めた」というところを“ sales shot up ”と英語でもメタファーが関与する表現になってはいるが、別の表現で処理している。

次に、日本語では「ように」と直喩を表す表現が使われているが、英語では「ように」に相当する表現を使わずに隠喩で処理している場合をみてみる。

⑳a.　彼女は吐き捨てるようにそう言うと、よろめきながらベッドから立ち上がった。（p. 40）

b.　She spit out the word as she climbed out of bed and staggered to her feet.（p. 34）

㉑a.　風の匂い、太陽……太陽は中空にありながら、まるで夕陽のようにオレンジ色の巨大な塊りと化していたのだ。（p. 126）

b.　The scent of the breeze, the sun. . . The sun was still high in the sky, yet it shone orange, a giant lump the color of the setting sun.（p. 103）

⑳の例では、「吐き捨てるようにそう言う」という日本語が、英語では“ spit out the word ”（「その言葉を吐き捨てた」）となっており、英語の方が隠喩を使い、表現的にはインパクトの強い言い回しになっている。㉑の例では、かなり表現の仕方を変えて翻訳してあるが、英語では「ように」に相当する表現は使わずに、隠喩で処理されている。

次の㉒の用例では、一語一句訳すのではなく、日本語では、１文で表現している内容の意味をくみ取り、英語では２文に分割し別の表現で処理している。このような翻訳の仕方が成功するかどうかは、翻訳者の能力に依存するところが大きいと思う。

㉒a.　彼女は僕の胸に頭を乗せ、唇を僕の乳首に軽くつけたまま眠ったように長い間動かなかった。（p. 145）

b.　She rested her head on my chest, and for ages just stayed there motionless with her lips on my nipple. I almost thought she'd gone to sleep.（p. 117）

最後に、日本語が全く翻訳されていない例を挙げておく。この作品の翻訳者の Alfred Birnbaum は、前にも述べたように、部分的に日本語を英語に訳出しないことがある。その例が㉓である。

㉓a.　軽くあわされた唇と、繊細な触角のように小さく上を向いた鼻、自分でカットしたらしい前髪は無造作に広い額に落ちかかり、そこからわずかに盛り上がった頬にかけて微かなニキビの痕跡が残っている。（p. 101）

b.　該当英文なし。（p. 81）

翻訳し忘れの可能性に関しては、これだけの文章を翻訳し忘れたとは考えにくいし、他のところでも、訳出しないことがあることは分かっているので、この箇所は翻訳者が、意図的に訳出しなかったと考える方が自然であろう。おそらく domestication 的思考により、この部分の描写は、英語圏の人には分かりにくいし、削除した方が話しの流れがスムーズになるという意

図が働いたのではないかと思われる。

3.2　様態用法

様態用法の「ように」は、陸路・川木（2000: 19）でも述べられているように比喩なのか様態なのか分類しがたいものがある。繰り返しになるが、特に比喩と様態はどちらの解釈もできそうな例もあり、プロトタイプ構造をなすものとして筆者は捉えているが、分類するとなると、どこかで線引きが必要になってくる。この稿での線引きは、前田（2006）にならい、レアリティーの反事実的事態を基準に分類している。

3.2.1　as if の用例

様態用法の「ように」の翻訳事例は、全体で15例であるが、like を使用した事例はなく、as if を使用した用例が７例である。１例は、対応する英語の文がないので、翻訳されている用例の半数をas if の用例が占める。まずここで、用例をみていく前に、as if の用法について確認しておきたい。『現代英語語法辞典』（p. 104）によると、「as if, as though に後続する動詞は、通例、その内容が不確実・仮想的・非現実的ならば、仮定法が、真実（らしい）と考えられれば直説法が用いられる」とある。つまり、as if とくると「まるで～のように」という表現がすぐ浮かんでくる日本人英語学習者は多いと思われるが、as if の守備範囲はもっと広い。非現実的な事象ばかりでなく、内容が不確実な場合や仮想的場合、真実（らしい）と考えられる場合でも使用できるので、様態用法の「ように」を翻訳する際も、このas if を使用した例が多く見られる。

また as if の後には、現在分詞・過去分詞・形容詞・前置詞句が続くことも可能である。この作品では、過去分詞を使った用例はなかったが、それ以外の用例は使用されていた。以下に、それらを使った用例もあげておく。

㉔a.　彼女は何も言わずにクスクス笑ってギムレットを一口飲み、思い出したように突然腕時計を見た。（p. 50）

b.　She just snickered without saying anything, took a sip of her gimlet, then, as if she remembered something, suddenly glanced at her watch.（pp. 42–43）

㉕a.　火を点けて三口ばかり吸うと、フィルターについた口紅を点検するようにじっと眺めてからそれを車の灰皿に押し込み、そして次の煙草に火を点けた。（p. 44）

b.　She'd light up a cigarette, take three puffs, remove it from her mouth and stare at it as if examining the lipstick smudges, grind it out in the car ashtray, and light up another one.（pp. 37–38）

㉖a.　鼠は手の甲で口についた泡を拭い、考え込むように天井を眺めた。（p. 120）

b.　The Rat wiped the foam from his mouth with the back of his hand and stared at the ceiling as if deep in thought.（p. 97）

㉗a.　彼女は夢を見るように、そっとそう呟いた。（p. 146）

b.　Her voice came low, as if from a dream.（p. 118）

3.2.2　分詞を使用した用例

分詞を使用した用例は、以下のように、現在分詞が１例、過去分詞が２例の合計３例である。

㉘a.　鼠は困ったように首を振った。（p. 23）

b.　The Rat shook his head, looking positively bewildered.（p. 19）

㉙a.　僕が隣りに座ると、彼女は少しほっとしたように言った。（p. 78）

b.　. . . she said, somewhat relieved as I sat down beside her.（p. 63）

㉚a.　鼠はハンドルに両手を置いたまま体を折るようにかがみこんでいたが、怪我をした

というわけではなく、ダッシュボードの上に一時間前に食べたピザ・パイを吐いているだけの話だった。(p. 19)

b. The Rat sat crumpled over, both hands on the wheel. Not hurt, just depositing the remains of the pizza he'd had an hour before onto the dashboard. (p. 16)

㉘の用例では、look(「(様子・外観などが)……に見える」『ジーニアス英和辞典』)という動詞を使用し、その様子を全体としてうまく翻訳している。㉙の例では、英語では「ように」に相当する表現がなく、“ somewhat relieved ”(「少しほっとして」)と英語の方がストレートな言い回しになっている。㉚の例でも同様に、英語の方がストレートな表現になっている。

3.2.3　その他の表現

まず、日本語では様態用法の「ように」という表現が使われているが、英語では「ように」に相当する表現がなく直接的な表現で処理している場合をみてみる。

㉛a. 彼女はテーブルに細い両肘をつき、その上に気持良さそうに顎を載せたまま僕の目をのぞきこむようにしてしゃべった。(p. 92)

b. She planted both elbows on the table for a chin rest and gazed into my eyes as she talked. (p. 74)

㉜a. 彼女は少し微笑むようにして肯いてから小刻みに震える手で煙草に火を点けた。(p. 139)

b. She gave me a little nod and a smile, then lit a cigarette. Her hand was trembling. (p. 112)

㉛の例では「僕の目をのぞきこむように」という日本語が、英語では“ gazed into my eyes ”(「私の目をじっと見つめた」)とストレートな表現で処理されている。㉜の例では、「少し微笑むようにして肯いて」が“ gave me a little nod and a smile ”(「少し肯き、微笑んで」)と翻訳してあり、ちょっと原文のイメージとはずれている気がする。しかし、日本語の1文を2文に分け、淡々と描写するこの翻訳の英語は、その状況が目の前で起こっているような流れのある英語になっている点は評価できると思う。

次に異なる表現でその様子を描写している例をみてみる。

㉝a. 彼女は煙草をもみ消し、ワインを一口飲んでから感心したようにしばらく僕の顔を眺めた。(p. 84)

b. She put out her cigarette, took a sip of wine, then studied my face a while. (p. 68)

この㉝では、「感心したように……僕の顔を眺めた」という表現を英語では“ studied my face ”(「僕の顔を注意深く観察した」)と異なる表現でその様子を描写している。このあたりの表現の違いは、誤訳ということではなく、翻訳者の裁量の範囲だと思う。

最後に、ここでも日本語が全く翻訳されていない例を挙げておく。

㉞a. 「何故ここで働いてるってわかったの?」
彼女はあきらめたようにそう言った。
「偶然さ。レコードを買いにきたんだ。」
(p. 64)

b. “ How'd you know I was working here? ”
“ Pure coincidence. I came to buy a record. ” (p. 52)

この場合、英語の方では「あきらめたようにそう言った」と翻訳しなくても、話しの流れで、歓迎していないということは分かるので、会話のリズムを重視したいために翻訳されなかった

のではないかと考えられる。よって、この場合も翻訳し忘れたのではなく、文章の読みやすさや、スタイルなどを考慮し、翻訳者が意図的に翻訳しなかったのだと思う。

3.3　同　等

前田（2006：23）は、同等用法とは「前件と後件という二つの事象が等しく成立する・事実である、ということを示すものである」としている。よって、ここでは英語の翻訳の事例をみてみると、like、as、the same as といった表現が見受けられるのも首肯できる。

3.3.1　like の用例

まず、like の用例をみてみよう。この用例は３例あり、うち２例をあげる。

㉟a.　完璧な絶望が存在しないようにね。（p. 7）
　b.　Just like there's no such thing as perfect despair.（p. 5）
㊱a.　彼女はそう言って、コンサート・ピアニストが意識を集中する時のように、両手をきちんとくっつけたままカウンターに並べた。（p. 82）
　b.　So saying, she put both hands out on the counter, wrists aligned like a concert pianist concentrating.（p. 67）

㉟の用例では、英語の方が凝った表現になっている。“ Just like there's no perfect despair. ” とするのではなく、“ no such thing as perfect despair ” と翻訳されている。このあたりは、文の流れやリズムなど、翻訳者の好みの問題が大きいと思う。㊱の用例では、語順は変わっているが、ほぼ原文通りの翻訳になっている。

3.3.2　as を含む表現

ここでは、まず as の用例をみてみる。この用例は２例であったが１例をあげる。「同等」の用例では「同じように」という日本語の表現がよく見られるが、㊲もその例である。

㊲a.　狭い店は客で溢れんばかりだったし、誰も彼もが同じように大声でどなりあっていたからだ。（p. 14）
　b.　The tiny bar was packed, and who wasn't shouting just as loudly at someone else？（p. 11）

この例では「同じように大声で」のところは“ just as loudly ” と処理されている。「同等」の用例の場合その性質上、just と共に表現されることもあることは首肯できる。

次に the same as の用例をみてみる。この用例は２例であった。

㊳a.　10分ばかり後で、グレープフルーツのような乳房をつけ派手なワンピースを着た30歳ばかりの女が店に入ってきて僕のひとつ隣りに座り、僕がやったのと同じように店の中をぐるりと見まわしてからギムレットを注文した。（p. 46）
　b.　Not ten minutes later, this grapefruit-breasted woman of about thirty came in wearing a loud dress, sat down right next to me, and began to survey the place the same as I had, before ordering herself a gimlet.（p. 39）
㊴a.　金持ちが金持ちを嗅ぎわけられるように、貧乏な人間には貧乏な人間を嗅ぎわけることができるのよ。（p. 79）
　b.　Poor people can sniff out other poor people the same as rich folk can sniff out other rich folk.（p. 64）

㊳の用例の日本語でも「僕がやったのと同じように」と「同じように」という表現が使われている。これを英語でも同様に“ the same as

I had ”と文字通りに翻訳しているパターンである。㊴の用例では、英語の翻訳では“ the same as rich folk can sniff out other rich folk ”（「金持ちが金持ちを嗅ぎわけられるのと同じように」）と英文として理解しやすいように言葉を足して翻訳してある。

3.3.3　その他の表現

その他の表現としては、３例あるが、うち２例をみておく。

㊵a.　しかし何れにせよ、大声を出してしまうと鼠はいつものように満足した面持でビールを美味そうに飲んだ。（p. 14）

b.　But whatever, once he'd let off steam, he went back to savoring his beer with his usual satisfied expression.（p. 11）

㊶a.　古代ギリシャ人がそうであったように、奴隷が畑を耕し、食事を作り、船を漕ぎ、そしてその間に市民は地中海の太陽の下で詩作に耽り、数学に取り組む。（p. 13）

b.　That's how it was with the ancient Greeks：while the slaves worked the fields, prepared the meals, and rowed the ships, the citizens would bask beneath the Mediterranean sun, rapt in poetical composition or engaged in their mathematics.（p. 10）

㊵の用例では「いつものように満足した面持ち」の部分を“ usual satisfied expression ”（「いつもの満足した表情」）とusual という形容詞で処理しているので、“ as usual ”（「いつものように」）という表現は使っていない。㊶の用例では、「古代ギリシャ人がそうであったように」の部分を how をうまく使って、処理している。このような処理の仕方は、日本人英語学習者にはなかなかできないので参考になる。

4．まとめ

紙幅の都合上、全ての用例を提示するわけにはいかなかったが、おおよその傾向はつかめたのではないかと思う。アメリカ文学の影響を強く受け、しかもこの『風の歌を聴け』では、村上春樹は最初に英語で書いて、それを日本語に翻訳していくことで、独自の文体を作り上げていったという特異な作品であるが（cf. 村上・柴田（2000：235））、そういった作品でも、英語に翻訳をする際に、domestication は避けられないということが見てとれる。このことに関しては、翻訳というものが、翻訳される言語で読者に受け入れてもらえなければ、せっかくの名著も読んでもらえないという厳しい現実が影響していることは否定しがたい。読みやすさというのは大きな要因なのである。

ここでは、分類の結果や考察を繰り返すことはしないが、村上春樹の類似事態を表す表現は、実に巧みである。そして、それが翻訳された英語をみても、その感覚がうまく表現されている事例が多いと思う。

今後も、文体研究・翻訳研究のためにこつこつと基礎データの収集に努力していきたいと思う。

注

1）domestication とは，foreignization と対立する概念で，翻訳の手法を議論する際に使われる Venuti の用語である．日本語を米語に翻訳することを例にとると，あたかも最初から米語で書かれた文章のように翻訳していき，米国で異質と考えられるような文化や表現などを排除していくことにより，その文章を読者が読みやすく親しみやすくする手法が domestication である．foreignization は，逆に米国では異質であったり，文化的に受け入れがたい表現であっても，作者の表現を尊重し，異質さをそのままにできるだけ忠実に翻訳していく手法である．（cf. Munday（2008：144–45））

2）この『風の歌を聴け』という作品は，村上春樹自身が，村上・柴田（2000：235）で述べているように，「とりあえず英語で書いて，それを全部日

本語に訳し直して日本語にした」という書き方で書かれており，それをまた英語に翻訳するとどうなるのか，それを丹念に調べることに筆者の関心はある．これが，まずこの作品を選んだ大きな理由である．

また，翻訳者の Alfred Birnbaum は，村上春樹の作品を翻訳している代表的な人物であり，村上春樹自身も個人的に好きな翻訳者で，自分の作品をよく理解してくれていると認めていることも理由の一つである．（cf. 村上・柴田（2000：18））

3）前田（2006：12）によると，『「レアリティー」とは「述べられている事態」と「現実」との「事実関係」』と定義されている．よって，「レアリティー」は，まず「事実的」か「仮定的」かに分類され，「仮定的」なものは，「仮説的」か「反事実的」かに分類される．そして，比喩表現は，反事実的事態を表す場合である．

しかし，この考え方を陸路・川木（2000）は，『「比喩」表現は非現実的な表現ではあるが，まったくの非現実的なものからかなり現実的なものまで幅広く存在し得るものであると思われる．』と問題点を指摘している．筆者も，先に述べたように，「比喩」「様態」「同等」の分類は，プロトタイプ構造をなすものだと考えており，その境界の判断は難しい場合もあることは認識している．しかし，この研究の目的は文体・翻訳研究であり，「ように」の分類自体が目的ではないことから，前田（2006）の分類が比較的分類の数が少なく，分類作業がしやすいということから，それに基づき分類をしている．細かい違いは，一文一文を分析していくことで可能であると考えている．

参考文献

泉原省二（2007）『日本語類義表現使い分け辞典』研究社．

小西友七（編）（2006）『現代英語語法辞典』 三省堂．

小西友七，南出康世（編）（2006）『ジーニアス英和辞典 第４版』 大修館書店（2007）．

柴田元幸，沼野充義，藤井省三，四方田犬彦（編）（2006）『世界は村上春樹をどう読むか』文藝春秋．

中村　明（2007）『日本語の文体・レトリック辞典』東京堂出版．

野内良三（2005）『日本語修辞辞典』 国書刊行会．

林　巨樹，池上秋彦，安藤千鶴子（編著）（2004）『日本語文法がわかる事典』（５版，2007）東京堂出版．

前田直子（2006）『「ように」の意味・用法』笠間書院．

松田徳一郎（監修）（1984）『リーダーズ英和辞典』研究社（1994）．

村上春樹，柴田元幸（2000）『翻訳夜話』文春新書．

村上春樹研究会（編）（2001）『村上春樹 作品研究事典』鼎書房．

陸路美礼，川木冴子（2000）「「ように」の基本的な意味―様態用法を中心として」『東海大学紀要　留学生教育センター』 Vol. 20.

Munday, Jeremy（2008）*Introducing Translation Studies : Theories and Application*.（2nd ed.）Routledge.